

特別寄稿

## 過去の克服か不可視化か？

### ——『エメーとジャガー』をめぐる記憶の政治

石井香江

#### 1 はじめに——「過去の克服」とジェンダー・セクシュアリティ研究の現在

戦後ドイツにおける「過去の克服」に関する研究は、日本でも1990年代から本格的に始まり、現在では政治、教育、文学、メディア、記憶・想起の文化という領域を中心に研究蓄積が進んでいる（石田, 1999, 2002, 2016; 川喜田, 2005; 対馬, 2006; 高橋, 2017）。他方、戦時中の同性間・異民族間の性愛関係<sup>1</sup>や売買春の規制、戦時性暴力などジェンダーとセクシュアリティが交錯する問題に取り組む研究は、史料上の制約や既存の歴史学の中ではタブー視される領域でもあることから、ドイツ本国においても多くはない。しかし近年、その重要性が再認識され、研究上の関心が高まりつつある。ここにクイア理論のインパクト（Hartmann & Klesse, 2007, pp.11-13）もあることは確かだが、ドイツの文脈ではさらに遡り、1970年代に西ドイツで起きた変化とも無縁ではない。この時期、戦前から戦後への世代交代も手伝い、歴史学の潮流が変化した。被害者側に立った歴史観や市民の運動体が登場し、当事者たちの語り（ナラティヴ）が大きな位置付けを与えられるようになったのだ。普通の人びとの日常を明らかにする新しい歴史学や市民運動の展開により、1980年代以降、非ユダヤ人である強制的不妊・断種手術の被害者（Bock, 1986; 小俣, 1995; Westermann, 2009）、シンティ・ロマ<sup>2</sup>（金子, 1998; Zimmermann, 2007; 千葉, 2009; Lotto-Kusche, 2018）、「同性愛

<sup>1</sup> 社会学・歴史学研究者のアレクサンダー・ツィンによると、史料上の制約の背景にあるのは、同性愛を理由に迫害を受けた人々が自らの経験を語りたがらないために、残されたエゴ・ドキュメントの数が少ないだけでなく、重要な公の資料も戦前にはSS（ナチの親衛隊）の手で燃やされ、戦火の中で焼失したり、戦後には検事や文書館の手によって破棄されることもあったという事情がある（Zinn, 2018, p. 11）。

<sup>2</sup> ドイツに居住したシンティやロマというエスニック・マイノリティを意味する。一般的には「ジプシー」（ドイツ語では「ツィゴイナー」という）として知られているが、これは彼・彼女たちに対する社会的・法的差別を反映した蔑称であり、自称ではないので、

者」(星乃, 2006; Schoppmann, 2016; 石井, 2017; Zinn, 2018; Hájková, 2018)、「反社会的分子」(Peukert, 1982; Ayaß, 1995; Schikorra, 2001; Sedlaczek, 2005)、「兵役拒否者」(Besier, 2003; Hacke, 2011)、強制労働者(Herbert, 1985, 2001; Spoerer, 2001)などが「忘れられた犠牲者」としてクローズアップされ、対象を限定した補償法の見直しにも繋がり(矢野, 2003)、ドイツ帝国内部での強制売春や戦時性暴力のみならず(Paul, 1994/1996; Wickert, 2002; Beck, 2004; Sommer, 2009; Mühlhäuser, 2010/2015; 田野, 2012, 2018)、ドイツ植民地下での性暴力についても光が当てられている(永原, 2000, 2016; Habermas, 2016)。本稿では、こうした研究上の進展にも関わらず、いまだ克服されぬ歴史の一つともいえる女性間の「性愛関係」(親密な関係)に関する記憶の継承と研究上の課題について、幾つかの事例を通して考察したい。

## 2 「忘れられた犠牲者」とは

まずは本稿の出発点として、「忘れられた犠牲者」という言葉の意味についてもう一度考えておきたい。そもそも「忘れられた」という消極的な表現は妥当なのだろうか。というのも、「忘れられた犠牲者」とされる集団は、戦中も戦後も、他の犠牲者集団から意識的に、明確に差別化されていたからだ。「忘れられた」というよりもより強い表現が妥当だろう。

ナチスは強制収容所に収容した人びとを、収容した理由を示すトライアングルの形と色で分類し、これを上着などに縫い付けさせた。よく知られている例では、ユダヤ人であることを示すトライアングルは、黄色のトライアングルを重ね合わせたダヴィデの星である。赤は政治犯、青は亡命者、紫色は聖書研究者、すなわち「エホバの証人」を指した。つまり、被収容者はトライアングルの色と形により細かく序列化され、異なった待遇を受けていた。この被収容者同士のいびつな分断状況を今に伝えるモニュメントが存在する。

ドイツのダッハウ強制収容所跡にある、「ナチスと闘って命を落とした者たち」のモニュメントには、実際には存在するはずの幾つかのトライアングルがない。ここには、黒・緑・ピンクのトライアングルが欠けているのだ。黒のトライア

---

本稿ではこの呼称を使用していない。詳しくは、以下の研究を参照のこと(金子, 1998; Zimmermann, 2007; 千葉, 2009; Lotto-Kusche, 2018)。

グルは精神的障がいを持つ者、放浪者、売春婦など社会生活に適合しないとされた「反社会的分子」、緑は犯罪を繰り返す再犯者・累犯者、ピンクは男性同性愛者を意味していた。彫刻家自身は当初、全てのトライアングルをモチーフにするつもりであったが、強制収容所の生存者たちが戦後に結成したダッハウ国際委員会の決定で、この三つのトライアングルは排除されたのだった。

戦後も男性同性愛行為を処罰する刑法175条が存続し、元被収容者たちは、「刑事犯罪者」と同列に追悼されることに強い抵抗を示したのである。刑法175条とは、1871年に成立し、「男性同士、また人間と動物の間で自然に反する猥褻行為が行なわれた場合、懲役2年までの禁固刑若しくは市民権の剥奪もあり得る」という内容である。この法律は処罰内容を少しずつ変えながら、戦後には東西ドイツで存続し、東西ドイツ統一後の1994年に廃止された。戦後も多くの人びとが、成人間の合意の上での同性愛行為でも処罰された。近年ではこの法律により処罰された人びとが、この事実を理由として仕事に加えて社会的信用を失うことで、社会生活から事実上排除されたこと、そしてこの社会的排除によって年金の受給額が低くなったという理由で判決と前科の取り消しを求めてきた。連邦司法・消費者保護大臣ハイコ・マース（2013-2018）は、刑法175条の存在により社会的排除を受けてきた人びとの存在を指して、「法治国家の恥」であるとし、司法上の取り組みも前進している。その結果2017年6月22日に、合意の上での同性間の性行為を理由に、戦後刑法175条の判決を受けた人々の名誉回復と補償が、連邦議会にて満場一致で可決されるまで運動は前進している<sup>3</sup>。

ナチスの迫害対象という意味では運命共同体であったはずの被収容者のあいだにおいてさえ、政治的信条や民族のみならず、「異性愛者」であるか否かによって、互いに線引きされていたということである。そして「同性愛者」は、収容所における階層構造の最下層に位置付けられていた。被収容者同士が相互に連帯するのを妨げたこの序列化のシステムは、ナチの暴力支配をその根底で支えた特徴でもあるが、そこでは性的志向が異性愛か同性愛かに二極化され、大きな意味を持っていたことは明らかである。現在ではより多様で流動的なものとして把握

<sup>3</sup> “Kabinett beschließt Rehabilitierung verurteilter Homosexueller”. Zeit Online (2017, October 21). Retrieved August 31, 2018 from <http://www.zeit.de/politik/deutschland/2017-03/bundesregierung-homosexuelle-rehabilitierung-entschaedigung-heiko-maas>

される性的志向であるが、本稿では当時の文脈に即して、同性間で「性愛関係」（親密な関係）にあると認識され、遇された人々を、便宜的に「同性愛者」と表現している。

ナチス政権下で望ましい性とは、優れた民族の子どもを産むことであり、このため異性愛は奨励された一方で、子どもを産まない、産ませない行為は、望まれない性として弾圧を受けた。ゆえに最下層に位置付けられたピンク・トライアングルは「恥辱」のシンボルとなった。この意味合いが大きく変わるのは、戦後40年近くが経過してからのことである。根深い差別に抗するための、(男性)同性愛者の集合的アイデンティティの表明として、ゲイ解放運動のシンボルとして、ピンク・トライアングルが象徴的に用いられるようになる。

### 3 「忘れられた犠牲者」の不可視化から可視化へ？

1980年代以降、ナチ期に強制収容所で虐殺ないし迫害された犠牲者として、民族的マイノリティと見なされていたユダヤ人だけではなく、強制不妊・断種手術や安楽死の対象となった障がいを持つ人びとやシンティ・ロマのほか、男性同性愛者が「忘れられた犠牲者」としてクローズアップされ、そのモニュメントもドイツ国内外で建設されることになる。これは被害者視点に立つ新しい歴史研究、ナチ時代の「普通の人びと」に迫る日常史の展開と市民の運動の働きかけによって勝ち取った成果であり、またこれが、民族的・宗教的・世界観の迫害などに補償対象を絞った補償法の見直しにも繋がったことは冒頭で触れた。

1984年以降自治体や市民組織のイニシアチブで、オーストリアのマウトハウゼンを皮切りに、つい最近では2016年に北ドイツのリューベックにおいて、ナチ政権下で刑法175条を理由に迫害された同性愛者たちを追悼する追悼碑が建立されるようになった。ベルリンのノーレンドルフプラッツやケルンのライン河沿岸の追悼碑のいずれも、ピンク・トライアングルがモチーフとなっている。そしていずれの追悼碑のプレートにも、「殴り殺され、死ぬまで沈黙させられた」というシンプルでかつ強烈な印象を与える文言が刻まれている。この文言はナチ政権下で虐待され、虐殺された同性愛者たちに捧げられているが、実際には刑法175条が存続した戦後も、差別状況は完全に克服されなかったことを意味している。

これを受けて2000年代には、ナチ政権下における同性愛者の犠牲をどのよう

に位置付けるかをめぐる議論から、「記憶の政治」とも呼べる動きが勃発した。「記憶」とは、辞書で説明されているように、たんに「過去に体験したことや覚えたことを、忘れずに心にとめておくこと。またその内容」（『大辞泉』）にとどまるのではなく、過去をどのように思い起こすかということで、これは「生ける集団によって担われ」るがゆえに「たえず変化し、想起と忘却を繰り返」し、「ありとあらゆる利用や操作を受けやすい」と、歴史家のピエール・ノラは記しているが（ノラ, 2002, pp.31-32）、特に女性同性愛者の歴史的な位置付けをめぐっては、議論に参加する人々の過去に向かう際の政治的立場の違いを反映して、見解が激しく対立したといえる。

2005年5月12日には、ベルリンのブランデンブルク門南側に「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための追悼碑」が建設された。ユダヤ人以外の犠牲者であるシンティ・ロマと同性愛者の追悼碑については別途建設することが連邦政府で決議され、同性愛者の追悼碑については2008年に落成式が執り行われた。2006年にはこの追悼碑の設計図のコンペがあり、二人の男性アーティストの作品が選ばれた。この作品に埋め込まれたTV画面には、二人の男性が延々とキスをするシーンが映し出され、そこに女性の姿はない。フェミニストとしても有名なアリス・シュヴァルツァーをはじめ歴史研究者のクラウディア・ショップマンが、女性同性愛者の存在が見えないことを批判し、議論が巻き起こった結果、他のアーティストが構想・撮影した作品を数年交代で上映するという案が可決された。これに対して、ダッハウはじめとするドイツの幾つかの強制収容所追悼地の所長・学識者ら25人が、この決定に反対する書簡を連邦首相府の管轄部署に送り、そこで女性同性愛者が同性愛者ゆえに組織的に迫害された歴史的証拠は存在せず、男性と女性の同性愛者をナチスの犠牲者として同等に扱うことは「歴史の捏造」であると批判した<sup>4</sup>。

そもそも女性同性愛の存在は長い間、法的にも社会的にも不可視であった。帝政期のプロイセンでは、ヴィルヘルム2世の相談役オイレンブルク侯爵の事件に代表されるように、男性たちが排他的な集団を形成し、政治的な影響力を行使するという理由で男性同性愛が危険視されたのに対し、政治的・経済的な影響力

<sup>4</sup> 以下、2章の文章は加筆しているものの、拙稿（石井, 2017）の記述と重複するので、参考文献の詳細などについては当論文を参照のこと。

が弱く、男性の庇護を必要としていた女性に関しては度外視されていたといえる。しかし、ナチ期には人口政策的な観点からも望まれない同性愛を取り締まる傾向が強まり、女性同性愛は公式には刑法175条で処罰されなかったものの、「反社会的分子」という別の罪状で捕われ、虐待を受けたり、強制収容所の被収容者向けの売買春施設で強制的に働かされ、拳銃の果てに殺された者もいたとする歴史研究が存在する（Paul, 1994/1996）。

にもかかわらず、なぜ女性同性愛者は他の「忘れられた犠牲者」と同等に追悼されることを拒まれているのか。その理由の一つとして、女性同性愛は後で触れるドイツ帝国刑法典並びにドイツ刑法において処罰対象ではなかったことが挙げられる。このため、女性同性愛者は公式にはナチスの迫害を受けていないことになっている。1990年代以降、この認識を覆すような歴史研究がドイツ内外で進展しているにも関わらず、依然この認識は強固である。女性が収容されていたラーフェンスブリュック強制収容所にも、1980年代から女性同性愛者の被害を明記する追悼碑の設置が求められているが、追悼碑財団より現在も退けられている。

先の議論に戻ると、議論の末に2012年には、公募作品から選ばれたもう一つの映像も公開されることになった。これは5組の同性カップルのキスシーン（内2組が女性、3組が男性、各シーンの出演者の世代、舞台となる時代や場所は異なる）からなる映像で、女性のカップルも登場してはいるが、その表現の仕方をめぐっては賛否両論がある。例えば、女性のカップルの方が危険に晒されることが少ないプライベートな場面に登場しているのに対し、男性はサッカースタジアムなどの公共空間に登場している。また、女性たちがキスをする姿を見ているのは女性や子どもで、女性たちが男性のように、ホモフォビックな社会的脅威に晒されているようには見えず、アリバイ的に女性が追加された印象は拭えないという意見もある。

以上をまとめると、近年これまで不可視であった「忘れられた犠牲者」である同性愛者に光が当たるようになったことは疑いもないが、女性同性愛者の可視化については議論が継続中である。他方で、ドキュメンタリー<sup>5</sup>、劇映画やテレビド

<sup>5</sup> 本稿で触れるドキュメンタリー『Love Story Berlin 1942』の他、ドキュメンタリー『刑法175条』は、ナチス政権下で同性愛者が置かれた状況について、撮影当時、米・ホロ

ラマなど映像作品の中では、長くタブーであったナチ時代の性に関わる問題（同性愛・戦時性暴力・売買春など）を取り扱い、広く一般に伝える試みがなされてきた（Anonyma, 2003/2008; Hake, 2004; Guger, 2008）。

#### 4 『エマーとジャガー』について

ここではその一例として1997年にドイツで公開されたM. フェルバーベック監督の映画『エマーとジャガー』を取り上げる。この作品の原作はノンフィクションで、タイトルは『エマーとジャガー——1943年ベルリンにおける愛の物語』とあるように、ナチ政権下における1943～44年のベルリンを舞台に、エマーことリリーとジャガーことフェリーツェという二人の女性の間における、民族と政治的立場を越えた「愛」を主題とする物語である。

原作者のエーリカ・フィッシャーは、ポーランド出身のユダヤ人を母に持ち、両親の亡命先のイギリスで生まれ、現在はオーストリアで活躍する作家でフェミニストとしても知られている。フィッシャーは、エリザベート・ヴスト（以下、リリー）という高齢のドイツ人女性が所蔵する当時の写真、自身の日記や恋人だったフェリーツェへの手紙、フェリーツェがリリーや姉に宛てた手紙や詩などエゴ・ドキュメントをはじめ、リリー自身やその息子、フェリーツェの友人たちの語りをベースにして本書を書き上げた。1994年に刊行されて以来、現在では14カ国語に翻訳されている。2002年には本書のダイジェストに豊富な写真資料を加えたパンフレットも出版されたことに加え、テレビのドキュメンタリー番組

---

コーストミュージアムの学芸員であった歴史研究者クラウス・ミュラーが、6人の男女（男5、女1）にインタビューを試みている（ほとんどの人たちが90歳を超えて人生で初めて口を開く）。ドキュメンタリーの中では唯一、アネット・アイク（後年、イギリスに亡命して詩人になる）というレズビアンを自認する女性が、1920年代の世界都市ベルリンに花開いた女たちのサブカルチャーやその後の迫害の一端について証言している。それによれば、当時、女性の同性愛は一時的なものであり、治癒する類のものとされ、女性はむしろ中絶をすると、男性同性愛者のような処罰対象になっていった。彼女は辛うじてイギリスに亡命できたが彼女の両親はアウシュヴィッツで亡くなった。この作品では、アイクが迫害されたのは性的志向ゆえではなく、ユダヤ系ゆえであったことが強調されているようにも見えるが、生活世界からの排除という意味では、そのいずれの要素もが影響を与えていたという捉え方が適切だろう。ホロコーストの当事者ではない、その後続く世代が、ユダヤ系であることと犠牲者であること、そして正しいことを、本質主義的に結びつけることに対する批判を、Vicarious Victimhoodという概念を使って、行っている研究もある（Rothe, 2017）。

やラジオで特集番組が制作され、朗読や討論会も数多く企画されるなど、一般にも好評を博している<sup>6</sup>。識字能力や前提知識の有無を要する文字媒体に比べれば、映画は歴史的事象を一般の人々に伝える波及力・影響力の強さが大きいと言えるが、本作品の場合は、そこにテレビやラジオまでが加わり、さらに広く一般の人々にアクセスしえた特筆できる事例である。

例えば原作と映画化された作品に対する Amazon.de のレビューは各々平均 4.7 (回答数は原作については 18 人と映画については 46 人) と非常に高い<sup>7</sup>。原作に対するコメントの代表的な数例を挙げてみる。「女性は必ず読むべし」(2009 年 9 月 28 日) というタイトルのコメントを記した Marion R. は満点の 5 点を与えているが、「レズビアンを主題にしながらも、これほど思いやりに満ちて、しかも徹底的に調べられた本を私はこれまで読んだことがない」と高く評価している。また「美しいけれど悲しい本」(2005 年 8 月 28 日) というタイトルのコメントを記した読者も 5 点を与えているが、「本書は二人の女性の間の許されざる、しかし美しい愛を描いている。相手のために闘うこと。厳しい時代にも助け合うことができること。思い出の品(写真や日記)を通して、この愛が想像を絶するほど強いものであったことを、しかし同時に、二人の関係が断たれた時の二人が感じた痛みと悲しみも描いている。愛がハッピーエンドを迎えなかったのは残念なことだ」と好意的にまとめている。映画について 5 点を与えている Maria Klausam は、「とても素晴らしい」(2016 年 1 月 25 日) というタイトルのコメントで、「素晴らしい映画作品。名作。二人の女性の間の愛、20 世紀のもっとも暗い時代の二人の人間について描いている。何度でも見たい映画だ」と称賛している。同じく 5 点の J.A.Hallbauer; Doc Halliday は、「二人の見事な演技による心を打つドラマ」(2015 年 7 月 21 日) というタイトルで、内容よりも主演女優たちの演技を評価する長文のコメントを寄せている。しかし実際には、本論の後半でも触れるように、原作とこれを映画化した作品には批判も向けられることになる。続いて、本作が一般的に好評である理由と、その何が問題なのかについて、原作を実際に読

<sup>6</sup> Gudrun Hauer (Hauer, 2009) は、2009 年までの本作の社会的な受容について検討しているが、それ以降の時期の検討や原作の詳細な検討がなされているわけではない。

<sup>7</sup> 2009 年までのコメントを含め、調査を行った 2017 年 11 月までのコメントを検討しているが、これはこの時点での数値である。

んであらためて考えてみたい。

まずは原作のあらすじをまとめておこう。二人の女性、フェリーツェとリリーが物語の主人公である。4人の息子（ベアント、エーバーハルト、ラインハルト、アルブレヒト）を持つ「ドイツ母親名誉十字章」の持ち主リリーは、元共産主義者の娘である。夫ギュンター・ヴストはドイツ銀行の元行員で、ナチ支持者であり、国防軍に従軍する兵士であった。もう一人の鍵となる人物であるインゲ・ヴォルフ（書店員で、父親は共産黨員、母親は社会民主黨員）は、リリーの家で奉仕義務<sup>8</sup>をしていたが、彼女は友人で潜伏中のユダヤ人フェリーツェ・シュラーゲンハイムにリリーのことを話す。その際にフェリーツェは、リリーが「ユダヤ人は匂いで分かる」と言っていたことを知り、それが本当かどうかを確かめたいと申し出て、インゲは二人を1942年11月に引き合わせるようになった。翌月の大晦日にリリーの家で開かれたパーティーを皮切りに、フェリーツェからリリーへのアプローチは積極的なものとなり、二人の関係はいつしか、お互いをエメーとジャガーと呼び合う親密な関係にまで発展した。1943年6月には夫婦財産契約まで結んでいる。

リリーは契約書に、「私はあなたを限りなく愛し、あなたに絶対に貞節であり、秩序と清潔に心を配り、あなたと子供たちと私のために勤勉であり、…（中略）…あなたを信頼して！私のものはあなたのもでもあります、私は常にあなたのために生きましょう」と記し、フェリーツェは「1、私はあなたを永遠に愛します。2、私はあなたを決して独りにしません。3、私はあなたを幸せにするためには何でもします。4、私は事情の許す限りあなたと子供たちの面倒を見ます。5、私はあなたが私の面倒を見ることに反対しません。6、私はもうきれいな女性を振り返って見たりしません。そうしたとしても、せいぜいあなたのほうがきれいだということを確認するためです。…（中略）…10、私はあなたを常に愛します」（Fischer, 1994/1998, pp.179-180）と記して返信している<sup>9</sup>。二人は1943年9月2日に結婚指輪の交換をし、リリーは翌10月に戦地にいる夫ギュンターが

<sup>8</sup> 1938年に導入された25歳未満の未婚女性に課せられた一年間の農業または家政奉仕義務。

<sup>9</sup> 以下、Fischer, Erica, *Aimée & Jaguar: Eine Liebesgeschichte, Berlin 1943* より引用。ページ数は日本語版（Fischer, 1994/1998）を参照している。

不貞をはたらいたという理由で離婚手続きを行った。夫は1942年12月以来、リリーが彼との性交渉を拒絶していたという理由で、彼に有責の判決を退け、結果的に両者に責任があるとの判断が下された。爆撃が迫るなか、フェリーツェとリリーは疎開しなかった下の子どもたちの面倒を見つつ、つかの間の二人だけの生活を送る。翌1944年7月、復縁を望むギュンターと手紙を交わしたフェリーツェはリリーに一種の遺言書をしたためる。それは彼女の財産をリリーに譲渡する内容だった。そしてその1カ月後の8月、リリーとフェリーツェはハーフェル湖までサイクリングをして、水遊びの際に写真撮影をするが、帰宅するとそこにはゲシュタポが待機しており、逃亡を試みたフェリーツェは拘束され、一時的にベルリンのユダヤ人病院に収容される。そしてその後、「特権的ドイツ系ユダヤ人」が送られるとされていたテレジエンシュタット<sup>10</sup>の収容所に移送された。リリーはその後フェリーツェを追い、警察の留置所やテレジエンシュタットにまで足を運んでいるが、そこで収容所司令部のSS軍曹ルドルフ・ハインドルに罵倒されて、追い返されている。記録によれば、フェリーツェはアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所に移送され、それから、労働が可能という理由でグロース・ローゼン強制収容所<sup>11</sup>に移送の途中で病を患い、1945年3月にベルゲン＝ベルゼン強制収容所<sup>12</sup>で亡くなった。公式の死亡届に死亡日は1944年12月31日、死因は塞栓症<sup>13</sup>と記されている（Fischer, 2002）。

その後リリーは、ベルリンに攻め入る赤軍兵士たちによる性暴力から身を守るために、ユダヤ人を示す黄色いダヴィデの星がついたフェリーツェの服を着用し、ユダヤ人と偽って生活した。戦後には、リリーのドイツ社会に対する嫌悪感強く、子どもにもその思いの丈を折に触れて伝え、父親を尊敬する長男のベアントはそれに反発を感じるほどだった。リリーはユダヤ教に改宗を試み、ユダヤ系コミュニティとも親しくなった<sup>14</sup>。次男のエーバーハルトは、母親からの影響

<sup>10</sup> ベーメン・メーレン保護領（チェコ）北部。

<sup>11</sup> ドイツ東部のシュレージエン地方で現在はポーランド領。

<sup>12</sup> 現在のドイツ・ニーダーザクセン州ハノーファーの北東。

<sup>13</sup> 血管やリンパ管の中に、遊離した血栓や外部から入った細菌などの異物が詰まり、流れを止める循環障害を指している。

<sup>14</sup> それはあたかも、フェリーツェを失った悲しみのあまり、フェリーツェを自分の内に取り込み、哀悼するような行為でもあったという解釈も存在する（Parkinson, 2001; Dawson, 2012）。

でヘブライ語を学び、ユダヤ学生グループのドイツ側の使節となり、後にイスラエルで生活するようになった。リリーは夫と離婚したが、双方に責任があるという理由で慰謝料の支払いはなかった上に、専業主婦だった彼女は職業訓練を受けているわけではなかったため、掃除婦や雑役婦として生計を立て、息子たち全てを大学に通わせた。そして息子たち全員が独立した後は、わずかな年金を頼りに孤独な老年期を過ごした。

リリーは1981年に、「1942～45年に4人のユダヤ人女性をシュマルゲンドルフにあるアパートメントに隠し住ませ、その面倒を見た」おかげで「3人の女性はナチ時代を生き延びた」という理由から、内務長官より「称えられることなかった英雄たち」の一人として「連邦功労十字綬賞」を受賞することとなり、67歳にして一躍時の人となった。その後、『善良なドイツ人たち』の執筆者であるアメリカ人ジャーナリストが、リリーに連絡をしてインタビューが行われたのを機に、フィッシャーも自ら聞き取りを行い『エマーとジャガー』を刊行し、1997年には二人の人生をたどるドキュメンタリー映画『Love Story Berlin 1942』が公開された。そして翌年には劇映画版『エマーとジャガー』も公開された。その結果、一般の好意的な評価とは裏腹に、生存者たちや批評家たちからの批判も受けることになるのだった。

## 5 事件の真相をめぐる「記憶の政治」

フィッシャーによれば、リリーに「ドイツ全国から山のように手紙が届いた」。そしてそれは、「女性への密かな愛を誰かに語ってみたいと思っていた既婚女性たち」であり、リリーに自己を投影する女性たちであったという (Fischer, 1994/1998, p.8)。興味深いのは、フィッシャー自身はこの傾向に複雑な心情を吐露している点である。彼女はユダヤ人としてフェリーツェに感情移入し、傍観者として、ナチ政権を支えたリリーを受け入れることはできないことを明言している<sup>15</sup>。しかし皮肉なことに、この作品をさらに有名にしたのが、1999年に公開さ

<sup>15</sup> 同じユダヤ系であるフェリーツェに感情移入し、リリーに対しては複雑な感情を示すフィッシャーの叙述に批判的な研究も存在するが (Rothe, 2017, p.8)、原作を検討した上での私見では、本書ではリリーに対する賛否両論の意見を比較的バランスよく取り上げ、読者に解釈の余地を与えているように思われる。

れ議論を呼ぶことにもなる映画であった。この作品はバイエルン映画賞、ドイツ映画賞をはじめ、権威あるベルリン国際映画祭（1999年）でも、二人の主演女優（マリア・シュラーダーとユリアーネ・ケーラー）が銀熊賞（女優賞）を受賞するなど、ドイツ国内の複数の映画祭で高く評価されただけでなく、ゴールデングローブ賞で外国語映画賞にまでノミネートされた。ただし結論を先取りすると、映画化された作品は、冒頭に「実際に起きた出来事」と紹介され、あたかもノンフィクションであるかのような装いをまもってはいるが、登場人物の様々な見方を織り込み、入念に構成された原作に忠実なかたちで映画化されたわけではなく（Sieg, 2002; Cormican, 2003）、二人を取り囲む当時の複雑な現実を捉えきれているとはいえない。事実、Amazon.deのレビューで映画作品に3点を与えたUGが、「映画作品の舞台装置と小道具は最高だが、ラブストーリーは生ぬるい」（2017年2月26日）で、「映画の筋、このラブストーリーが現実にあったということが映画に価値を与えている」が、他方で「二人が突然恋に落ちる設定が腑に落ちない」と批判しているように、ナチ政権下にも多くの障害を乗り越えようとした「ラブストーリーが現実にあった」という「事実」の存在そのものこそが、読者・観客の評価を総じて高めているようにも思われる。

ところが実際には、映画の中では原作に多くの変更が加えられており、続く議論の火種ともなった。例えば、映画の中で描かれているように、夫が戦地にいる間にリリーが彼の同僚の男性と観劇をしている場面をフェリーツェに目撃され、一目惚れされることもなかったし、フェリーツェとの関係が明らかとなり、逆上した夫からリリーが殴られることも実際はなかったことが、原作を読めば分かる。とりわけ、フェリーツェがリリーにあたかも「一目惚れ」したように描かれている点は、議論の中でも争点となった。映画では、フェリーツェがドイツにとどまった事実を、リリーに対する愛と結びつけ、二人の「愛」の強さを強調し、いわば「メロドラマ化」しているからである。しかし、原作を検討すれば、フェリーツェはリリーと会う前にも後にも国外に脱出しようとしていたが、時局の悪化でそれが適わない状況に追い込まれていったように読める。そしてこの事実が逆に、フェリーツェのリリーへの「依存関係」ともいえる「愛」を強めたのであり、その逆ではないと、生存者のエレナイは、先に触れたドキュメンタリー『Love Story Berlin 1942』の中でも証言している。

とはいえ、二人の「愛」の真正性を強調したところが、本作品の人気を支える理由でもあったことは、先に触れた読者・観客のコメントからも窺われる。もともとは反ユダヤ主義的であったリリーが、危険を顧みずにフェリーツェを愛し、支えたという、同年に公開された『シンドラーのリスト』のように「善良なドイツ人」の存在を裏付ける「美しい」物語は、政治的レベルというよりも、個人的レベルでのドイツ人とユダヤ人の和解の象徴でもあり、ドイツ社会で好意的に受け入れられたのも不思議ではない。事実、フィッシャーがリリーの加害性を指摘するや否や、反響は否定的なトーンを強めた。1994年刊行の初版あとがきで原作者のフィッシャーが、彼女を信頼して口を開いたリリーの戦時中の傍観者的あり方、現在の語り方や態度を揶揄・批判し、彼女に比して知的なフェリーツェがリリーのもとに戦後もとどまることはなかっただろうと書いているのだが、このコメントに対する反発は大きく、その後の版で削除されるほどであった（Fischer, 1994/1998; Fischer 1999）。

さらに原作と位相を異にするのが、映画の中ではフェリーツェとリリーのベッドシーン、フェリーツェの友人たちの享乐的なパーティーの場面やヌード撮影場面に時間が割かれている点である。彼女たちが、写真屋で身分証明書を捏造してもらった代わりに、兵士向けヌード写真を撮影させていた記述は原作にもある。それは、生き残るための必死の生存戦略なのだが、映画ではその悲壮感のみならず、ヌードとなる女性たちの様子は、戦時中とは思えないほど明るい。性的消費の対象にもなりうるこうした場面は、「ポルノ化」とも表現できるだろう。ここでは確かに女性間の性愛も可視化されているが、フェリーツェとリリーの関係を当時の政治的・社会的文脈に照らして慎重に検討する作業はなされてはいない。

このように映画では描かれなかった部分に光を当てたのが、フェリーツェの友人でもあった生存者たちやユダヤ系コミュニティの批評家たちであった。なぜフェリーツェがゲシュタポに逮捕され、強制収容所ないし死の行進で命を落とさねばならなかったのか、その理由に注目する議論がそこで展開された。具体的には、フェリーツェが、実は、財産目当てのリリーにユダヤ人だと密告されたのではないのか、そしてそこに追い打ちをかけるかのように、リリーが軽率にも収容所にいるフェリーツェを訪問したからではないかという指摘である。しかしここでは興味深いことに、フェリーツェがゲシュタポにリリーとの親密な関係を追

求され、「反社会的分子」として見なされた可能性については全く言及されていない。

フェリーツェの友人でもあった生存者のエレナイは、リリーを二つの理由で批判している。一つは、夫婦財産契約をめぐるものである。この契約を結んで一ヶ月後にフェリーツェがゲシュタポに逮捕されたのは、フェリーツェの財産を奪うために、リリーが密告したからではないかという。

「フェリーツェは、リリーが彼女の所持品を自分のものにしようとしていることで私と話し合いました。…（中略）…リリーにとってフェリーツェのものはたいへんな宝だったんです。人々がユダヤ人の財産を着服してしまうのは、いわば時代の趨勢でした。彼らは盗みもしましたし、他人のものを手に入れるためにその人を密告したりもしました」（Fischer, 1994/1998, pp.276-277）。

原作には、フェリーツェがレジエンシュタットに移送される前に、彼女がリリーに級友が密告したと伝えたと記されているが、その真偽を確かめることは難しい。エレナイは、遠くにいる級友が密告したというもう一つの説は根拠も希薄で、不自然であるのに加え、ゲシュタポが持っていたフェリーツェの写真をもともと所有していた人物の数は限られているはずであり、それゆえにリリーが疑わしいのではないかという（Fischer, 1994/1998, pp.276-277）。

もう一つは、リリーの自己中心的で軽率な行動に対する批判である。フェリーツェを追い、レジエンシュタット収容所へ赴いたリリーだが、友人や家族が訪問したユダヤ人の被収容者は、絶滅収容所に送られる可能性が高かったとエレナイは言う。エレナイの忠告も聞かず、思慮もなくフェリーツェを訪ねたりリリーこそ、フェリーツェの死を早めたのではないかとエレナイは考えている。これは、映画の最後のシーンで、リリーが収容所を訪ねたことが「フェリーツェに対する愛」ゆえであり、またフェリーツェが、自分をそれほどまで愛してくれる「リリーのそばにとどまった」のだというインゲの台詞に対する批判でもある。

「フェリーツェに食べ物を届けたいという気持ちは私にもわかりました。で

も、彼女がどうしても自分で持っていきたいというのは理解できませんでした。…(中略)…結局私たちは手を引くしかなくて、なるようにしかならないわねって言うだけでした。最悪のことが起こらないようにと願いながらね」「彼女がどんなに勝ち誇って戻ってきたか、今でも思い出しますよ。「やったわ。中に入りこんだのよ！また追い出されちゃったけれど、でもあいつらにわからせてやった！」このことで、フェリーツェがどうなるだろうかということは、彼女は一切心配しませんでした」(Fischer, 1994/1998, pp.277-282)。

収容所を訪ねたことを武勇秘にするリリーのような人物の話には、信憑性がないとエレナイは言う。エステル・ディッシュライトやクレメンス・ヘニらに代表されるユダヤ系コミュニティの批評家たちは、フェリーツェとリリーの関係が、一般には対等な女性間の親密な関係と理解され、好意的に見られているが、二人の関係は非対称的で、厳しい時代を生き抜く生存戦略<sup>16</sup>としての「売買春」と紙一重であったと記している (Dischereit, 2001; Heni, 2004)。原作者のフィッシャー自身も、リリーに一定の距離を保ち、同じユダヤ人のフェリーツェに強く感情移入しており、『エメーとジャガー』に描かれる二人の関係を現代のレズビアンたちが理想化し、「愛」として捉えることにフィッシャーは非常に懐疑的である。すなわち、積極的にナチ政権を支持してはいなかったかもしれないが、ナチ政権下で4人の子供の母親としての特権を享受していたリリーの消極的な加害性が見落とされがちであることや、読者がヒロインの立場に共感するあまり、フェリーツェがユダヤ人であったからではなく、女性への愛ゆえに迫害されたと考えがちであることに警鐘を鳴らしている (Fischer, 1994/1998, pp.10-11)。

以上、リリーやエレナイという生存者の証言に耳を傾けてみたが、真相はどうであったのか。フェリーツェが亡き今、リリーの語り、フェリーツェとリリーとの間で交わされた手紙、フェリーツェが姉に送った手紙をあらためて検討することで、二人の実際の心の動きをある程度跡付けることはできる。映画では十分に

<sup>16</sup> ナチ期に抵抗運動に関わり、潜伏生活を送っていたユダヤ系のガド・ベック (ドキュメンタリー『刑法175条』にも登場)も、生き残る上で社会的・性的なスキルが重要であったと自身の回想録で記している (Beck, 1999)。

伝わってこない、フェリーツェがリリーに出会う1942年までの苛酷な状況（父母・祖母らの死、亡命の試みの失敗、工場での労働義務と潜伏生活）も考慮した場合、フェリーツェがリリーにたんに「一目惚れ」したとは考えにくい。ナチスのシンパである兵士の妻であり、反ユダヤ主義的な発言をしたリリーのもとにユダヤ人がいる可能性は低いだろう。だからこそ、そこにユダヤ人として潜伏していても発覚しにくい。その上、4人の子どもがいるため配給が豊富であり、食糧も十分にある。したがって、二人が出会って間もなくリリーに花束を贈り、頻繁に電話をするなどの、不自然とも言える度重なる求愛行動には、リリーの歓心を買ひ、安全な潜伏先を確保しようという目論見があっただろうとも推測できる。潜伏したユダヤ人たちは、明日にでも見つかるか、密告されたりして、ゲシュタポに逮捕されるかもしれないという不安を常々抱きつつ、食べ物や逗留先を確保して生き残るのに必死であったからだ。当初はこのような状況を背景とする打算の関係だった可能性が否めないとはいえ、フェリーツェがリリーの家を頻繁に訪れ、リリーの優しさに触れるにつれて、二人の距離は縮まった。そして、リリーが入院中については一線を越えて、二人の関係は愛情に基づく信頼関係へと変化する。リリーは次のように振り返っている。

「男の人たちとのときは何も感じませんでした。男の人たちは満足していましたけれど、私は道具にされた気分だったのです。フェリーツェのときはまるで違ってました。彼女は私に真向から向き合う人間で、文字通り、私の反射像でした。…（中略）…愛と性は完全一体で、分かちようがなかったんです。…（中略）…私は生まれたばかりのような気がしました」（Fischer, 1994/1998, pp.59-60）。

二人の関係の変化に「性愛」という要素が大きな役割を果たしていたことは確かであろう。ただそこでは、「愛と性は完全一体」というように性と愛とが分かちがたく結びついていた。リリーの家の間借り人のローラも、「リリーには愛情が必要だったんです。そして多分夫から得られなかったものがあって、だから彼女はあんな風変わったんです。彼女はフェリーツェと一緒に幸福でしたよ、本当ですよ。間違いのないですよ」（Fischer, 1994/1998, p.210）と証言している。それ

では、当のフェリーツェの心の動きはどうだったのだろうか。彼女が1943年7月に、ロンドンに亡命していた姉イレーネに次のような手紙を書いている。

「リリーは全然卓越した人物じゃないし、インテリでもないし、平均的な頭脳の持ち主なんだけど、私の世界や私が読む本や私が関心を抱いていることを理解しようとする様子がとても可愛いし、それに私が望む通りに私と暮らそうと骨折ってくれているの。当然大きな責任をしょいこむことになるけど、私に無条件に愛を捧げ、味方してくれる人のためなら覚悟のうえよ。…（中略）…特に小さい子たち、離婚後に私たちが引き取ることになっている二歳と四歳の「私たちの」子供たちときたらかわいらしいのよ」（Fischer, 1994/1998, pp.183-184）。

また、同年8月10日に姉宛に送った手紙の中ではこう述べている。

「彼女のほっそりした手に、ケーテからもらった私の小さい時計がとても似合っているの。彼女を赤面させるのは、ひどくおもしろいわ。それに彼女が目を細めると、何も考えずに私の財産をあげたくなるくらいよ——…（中略）…それにもし私が何もできないようなことにでもなったら、いつかすべてを埋め合わせてくれるって約束して頂戴。彼女は離婚するので、今や私に責任がかかってくるのよ。…（中略）…私の所有となっている綿布製品と食器類はたいていムッティのところにいっちゃってて、今は私は手がつけられないの。できることなら、リリーが所有すべきなのよ」（Fischer, 1994/1998, pp.185-187）。

この手紙からは、フェリーツェが「ムッティ」（注：ドイツ語で母親を意味する、女性のあだ名である）に預けていた自分の所有物を取り戻そうと腐心していたことが伺える。この時期、潜伏ユダヤ人の逃亡を手助けする人びとは、金銭ではなく、物品を好んでいたの、手持ちの物品を確保することは、フェリーツェにとって生存のために不可欠であった。また、リリーとギンターが離婚し、主婦であったリリーが経済的後盾を失ったことに責任を感じるフェリーツェが、リ

リーに財産を遺そうとしていること、また、子供たちの面倒を二人でみる意志が窺える。フェリーツェはリリーや両親に宛てた手紙の中でも、冗談交じりに自分を子供たちの「父親」と記し、実際にあたかも父親であるかのように、手の届かない収容所から、妻のリリーと子供たちを気遣っている。リリーもフェリーツェにそのような役割の遂行を望んでいたことが、『Love Story Berlin 1942』に登場するエレナイ自身からも証言されている。

また、エレナイが強く疑っていたように、リリーは実際にフェリーツェの所有物を奪い、私物化していたのだろうか。リリーはテレジエンシュタットにいるフェリーツェに毎日小包二つを送っていた。その中には砂糖、ソーセージ、乾麺、パン、小麦粉、バター、ビスケット、果物、ジャガイモなどの他、脱脂綿やハイソックス、練り歯磨きなど食糧から日用品までが豊富に詰め込まれていた (Fischer, 1994/1998, p.283)。前線にいる夫ギュンターには手紙とビスケットしか送っていないのに比べて、中身は充実している。4人の子どもに対して配給が十分にあったとはいえ、戦時中とは思えぬ品々であり、配給品だけで賄っていたとは考えにくい。フェリーツェの持ち物で物々交換をしていたか、換金していた可能性もある。そしてエレナイが問題視していた収容所の訪問も、その目的は食糧を手渡すことと、フェリーツェが4人の子どもと、「ドイツ母親名譽十字章」を持つ模範的ドイツ人女性の友人がフェリーツェにいるということ、収容所の責任者であるハインドルに知らせるためだった。

「友人がまだシュール通りのユダヤ人集結所にいたときは、毎日食べる物を持って行ってやりました。そこでは何の問題もありませんでした。… (中略) …私は友人と人間として知り合い、好きになったのです。… (中略) …彼女がユダヤ人だというのは後になってから知りました。私の脳裏から彼女を消し去ることは、誰にもできません。私の子供たちは彼女が好きです」 (Fischer, 1994/1998, pp.280-281)。

ここでリリーは、自分とフェリーツェに降りかかる危険を顧みず、ただただフェリーツェに食べ物を届けたい、彼女に対する愛情をハインドルに伝え、何とかできないものかという気持ちだけで一杯である。リリーが毎日送る小包に対する

フェリーツェの手紙も残っている。

「何と見事にお菓子を焼いてくれたこと！そしてあなたのしてくれた刺繍のきれいなこと！全部心をこめて詰めてくれたのね！」(Fischer, 1994/1998, p.290)。

フェリーツェにとって、リリーから送られる食糧、リリーや子どもたち、友人たちの様子を伝える手紙は、苛酷な状況を生きる上での唯一の心の支えだった。フェリーツェに届くことのなかったリリーからの最後の手紙にも、次のように書かれている。

「私は手紙だけを頼みの綱に生きているのよ、だから、できればどうかすぐに、すぐにまた書いてちょうだい、あなたがまだ私を愛しているって。私を腕に抱いてね。私もあなたを抱くわ。いつもあなたの愛しい恋人であり 常にあなたの猫より」(Fischer, 1994/1998, p.298)。

収容所と空襲という生と死の隣り合う緊迫した状況下で生きていた二人には、手紙による意思の疎通と愛情の確認だけが、生きる希望に繋がっていた。戦後のリリーの生活の窮乏ぶりから判断しても、彼女がフェリーツェの財産を生活の足しにしていたとは考えにくい。

さしあたり原作を注意深く読み返してみる限り<sup>17</sup>、二人の関係を、映画において強調されているように、もっぱら「性愛」という観点から捉えるのも、エレナイやユダヤ人コミュニティのように、ドイツ人とユダヤ人、つまり加害者と被害者という二項対立的な見方で、打算的な関係という観点から捉えるのも正しくはないだろう。二人の関係はこの二つの極の間にあったと考えるのが妥当ではないか。フェリーツェからすれば当初は打算的關係ではあったが、そこから民族や政治的立場を超えた絆や相互扶助といった共同性が育まれ、最後には夫婦に近い関係となり、財産と子どもを共有する状態になったといえる。ただしこれはもちろん

<sup>17</sup> 原作が依拠するエゴ・ドキュメントが信頼できるものであり、フィッシャーによって慎重に資料批判されているという留保付きではある。

ん、今は亡きフェリーツェ自身の証言を得られないなかでの解釈に過ぎず、批判にもあったように、「死者抜きの手先な和解」であり、加害責任を追求する課題は残されている。

実は原作にはフェリーツェとリリー以外の女性間の親密な関係性がしばしば登場する。戦時下で男女の活動領域が一層分離したことが、この傾向を促したともいえる。男性が兵士として前線に行っており不在であるとか、その男性が一時帰国しても、性病に感染している可能性があるので性行為を避けるとか、戦争という過酷な状況を生き抜くための「戦友」として女性が女性と親密な関係を結ぶなど、その理由は様々であった。いずれにしろ、同性のカップルの存在は、異性愛関係が自明とされていた常識を揺るがしもしただろう。共産主義者やユダヤ人、また、ユダヤ人と付き合っていた人や売春婦と同様に、女性と親密な関係を結んでいた女性も、同性愛者として中傷・密告され、迫害を受けたことも推測されうる。

以上をまとめると、次のようになるだろう。映画では観客を意識する制作者の意図が働き、「性愛」という側面が前景化されていた。これは、「忘れられた犠牲者」を掬い上げ、歴史の中に埋もれた女性同性愛を可視化する試みとして限定的に評価<sup>18</sup>できるとしても、その全体像を不可視化する役割も果たしていることは看過すべきではない。

## 6 おわりに——まとめと展望

歴史研究者のクラウス・ミュラーは、女性同性愛者が同性愛という理由で迫害された個別ケースは存在しても、彼女たちが組織的かつ大量に迫害されていたことを実証するのは困難であるという立場を示している<sup>19</sup>。他方、オーラルヒストリーや警察の事情聴取記録を用いて、1990年代からナチ時代の女性同性愛者の迫害について研究を発表している歴史研究者のクラウディア・ショップマン

<sup>18</sup> 本稿は筆者の専門と関心の制約から、歴史研究寄りの見方を離れて、映画研究の立場から詳細に表象を検討した上で本作品を評価してはいないが、こうした観点からなされた研究も、もちろん存在することを付記しておきたい (Parkinson, 2001; Sieg, 2002; Cormican, 2003; Dawson, 2012)。

<sup>19</sup> 石井香江. (2017). 「記憶とジェンダー —— 「忘れられた犠牲者」の記念碑をめぐる」。『女性史学』, (27), 15-23.

は、近年はベルリン州立文書館や国際赤十字の資料、ラーフェンスブリュック強制収容所の入所記録や、強制収容所から生還した被収容者たちの書き残した文章も調査している。ショップマンによれば、女性同性愛者は刑法の処罰の対象外であったものの、実際は「レズビアンである」ということが入所理由になっているケースもある (Schoppmann, 2016)。社会生活に適合しない「反社会的分子」など、他の罪状で逮捕された際に同性愛行為が発覚した場合もあるし、同性愛行為が「反社会的分子」という罪状で逮捕の理由になった場合もある。その場合、女性の事例は統計上残らず、歴史的事実として認識されることはない。また、1990年代以降のクリスタ・パウルの研究をはじめとする新しい歴史研究では、「反社会的分子」として逮捕された女性は、強制収容所で囚人相手の売春を強制され、身体を酷使された挙げ句に、殺害されたことも明らかにされている (Paul, 1994/1996)。これは、女性同性愛者が売春婦と並ぶ「反社会的分子」として、男性同性愛と同様に収容所の階層構造の最下層に位置付けられていたことを意味している。「組織的かつ大量」の迫害ではないから、この事実を蓋をするのではなく、どこであらたな事実を掘り起こし、それをどのように次世代に伝えていくのか、現時点での課題は多い。

本稿では、女性同性愛という不可視だった問題が可視化されているかに見える映像作品の中で、女性同性愛の「性愛」という側面がクローズアップされるあまり、その実像が不可視のままであることを、幾つかの例をあげて示した。『エマーとジャガー』の事例を通して、女性間の親密な関係性の実像を理解するためには、異性愛関係を自明視する認識 (Heteronormativität) を反省し (Wagenknecht, 2007, pp.17-19)、女性間の「性愛」に加えて、絆や相互扶助などの共同性という側面にも着目する必要があることが明らかとなった。こうした女性間の親密な関係性の多様な中身を明らかにしつつ、もちろん忘れてならないのは、こうした関係性が、ナチ期には当事者たちの認識とは裏腹に、どのように見なされ、処遇されていたかという問題、つまり女性同性愛の迫害の実態に関する歴史的検証であろう。

## References

- 石井香江. (2017). 『記憶とジェンダー ——「忘れられた犠牲者」の記念碑をめぐる』. 『女性史学』, 27号, 15-23.
- 石田勇治他. (1999). 『ジャーナリズムと歴史認識——ホロコーストをどう伝えるか』. 東京: 凱風社.
- 石田勇治. (2002). 『過去の克服——ヒトラー後のドイツ』. 東京: 白水社, 2002年.
- 石田勇治他. (Eds.). (2016). 『想起の文化とグローバル市民社会』. 東京: 勉誠出版.
- 小俣和一郎. (1995). 『ナチスもう一つの大罪——「安楽死」とドイツ精神医学』. 東京: 人文書院.
- 金子マーティン. (Ed.). (1998). 『「ジプシー収容所」の記憶——ロマ民族とホロコースト』. 東京: 岩波書店.
- 川喜田敦子. (2005). 『ドイツの歴史教育』. 東京: 白水社.
- 対馬達雄. (2006). 『ナチズム・抵抗運動・戦後教育——「過去の克服」の原風景』. 東京: 昭和堂.
- 高橋秀寿. (2017). 『ホロコーストと戦後ドイツ——表象・物語・主体』. 東京: 岩波書店.
- 田野大輔. (2012). 『愛と欲望のナチズム』. 東京: 講談社.
- . (2018). 「ドイツ占領下ワルシャワの売買春」. 『歴史評論』, 820号, 19-31.
- 千葉美千子. (2009). 「〈記憶の可視化〉に向けた犠牲者集団の取り組み——もうひとつの「警鐘碑」に託されたロマ民族の願い」. 『Sauvage』, 5号, 7-16.
- 永原陽子. (2000). 「南アフリカ——真実和解委員会と女性たち」. In 内海愛子他 (Eds.) 『戦犯裁判と性暴力』. 東京: 緑風出版, 237-257.
- . (2000). 「植民地期ナミビアでの大虐殺に関する対独補償要求」. 『アフリカレポート』, 54号, 13-18.
- 星乃治彦. (2003). 『男たちの帝国——ヴィルヘルム2世からナチスへ』. 東京: 岩波書店.
- 矢野久. (2003). 「ドイツ戦後補償と強制労働補償基金の意義」. 『三田学会雑誌』, 95巻4号, 669-696.
- ピエール・ノラ. (2002). 『記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史〈第1巻〉対立』 (谷川稔, Trans). 東京: 岩波書店.
- Anonyma. (2008). 『ベルリン終戦日記——ある女性の記録』. (山本浩司, Trans.). 東京: 白水社. =(Original work published 2003), *Eine Frau in Berlin. Tagebuchaufzeichnungen vom 20. April bis 22. Juni 1945*. Frankfurt am Main: Eichborn Verlag.
- Ayaß, Wolfgang. (1995). „Asoziale“ im Nationalsozialismus. Stuttgart: Klett-Cotta.
- Beck, Birgit. (2004). *Wehrmacht und sexuelle Verbrechen: Sexualverbrechen vor deutschen Militärgerichten 1939-1945*. Paderborn: Ferdinand Schöningh.
- Beck, Gad. (1999). *An underground life: Memoirs of a gay Jew in Nazi Berlin*. (A. Brown, Trans.). Madison: University of Wisconsin Press.
- Besier, Gerhard and Clemens Vollnhals. (2003). *Repression und Selbstbehauptung: Die Zeugen Jehovas unter der NS- und der SED-Diktatur*. Berlin: Duncker & Humboldt.
- Bock, Gisela. (1986). *Zwangsterilisation im Nationalsozialismus. Studien zur Rassenpolitik und Frauenpolitik*. Opladen: Westdeutscher Verlag.
- Cormican, Muriel. (2003). Aimée und Jaguar and the banality of evil. *German Studies Review*, 26:1, 105-20.

- Dawson, Leanne. (2012). Aimée, Jaguar and gender melancholia. *Studies in European Cinema*, 9:1, 33-52.
- Dischereit, Esther. (2001). Aimée und Jaguar. *Mit Eichmann an der Börse: In jüdischen und anderen Angelegenheiten* (pp.62-72). Berlin: Ullstein.
- Fischer, Erica. (1998). 『エメーとジャガー——ベルリン、愛の物語』. (梶村道子, Trans.). 東京: 平凡社. = (Original work published 1994). *Aimée & Jaguar: Eine Liebesgeschichte, Berlin 1943*. Köln: Kiepenheuer und Witsch.
- . (1999). *Aimée & Jaguar: Eine Liebesgeschichte, Berlin 1943*. München: dtv.
- . (2002). *Das kurze Leben der Jüdin Felice Schragenheim: >Jaguar< Berlin 1922-Bergensen 1945*. München: dtv.
- Guger, Astrid. (2008). *Frauen als Opfer der Shoah und ihre Darstellung im deutschsprachigen Spielfilm*. Acad. Educ. Diploma Thesis, The University of Vienna.
- Habermas, Rebekka. (2016). *Skandal in Togo: Ein Kapitel deutscher Kolonialherrschaft*. Frankfurt a. M.: S. Fischer.
- Hacke, Gerald. (2011). *Die Zeugen Jehovas im Dritten Reich und in der DDR: Feindbild und Verfolgungspraxis*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Hájková, Anna. (2018). Queere Geschichte und der Holocaust. *Aus Politik und Zeitgeschichte*, 38-39, 42-47.
- Hake, Sabine. (2004). *Film in Deutschland: Geschichte und Geschichten seit 1895*. Reinbek: Rowohlt.
- Hartmann, Jutta and Christian Klesse. (Eds.). (2007). *Heteronormativität: Empirische Studien zu Geschlecht, Sexualität und Macht*. Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaften.
- Hauer, Gudrun. (2009). Erica Fischers ‚Aimée & Jaguar‘: eine Analyse ausgewählter Beispiele der Rezeptionsgeschichte. In E. Frietsch & C.Herkommer. (Eds.). *Nationalsozialismus und Geschlecht. Zur Politisierung und Ästhetisierung von Körper, „Rasse“ und Sexualität im „Dritten Reich“ und nach 1945* (pp. 395-411). Bielefeld: transcript.
- Heni, Clemens. (2004). Ein Schlag ins Gesicht der Überlebenden: Eine retrospektive Kritik an „Aimée & Jaguar“. *haGalil.com. Jüdisches Leben online* (2004, April 25). Retrieved November 1, 2017, from <http://www.hagalil.com/archiv/2004/04/fischer.htm>
- Herbert, Ulrich. (1985). *Fremdarbeiter: Politik und Praxis des „Ausländer-Einsatzes“ in der Kriegswirtschaft des Dritten Reiches*. Bonn: Dietz.
- . (2001). *Geschichte der Ausländerpolitik in Deutschland: Saisonarbeiter, Zwangsarbeiter, Gastarbeiter, Flüchtlinge*. München: Beck.
- Lotto-Kusche, Sebastian. (2018). Minderheitengeschichte als historische Subdisziplin in Deutschland. Herausforderungen für die Forschung am Beispiel der Minderheit der Sinti und Roma. *Aus Politik und Zeitgeschichte*, 38-39, 25-30.
- Mühlhäuser, Regina. (2015). 『戦場の性——独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』(姫岡とし子, Trans.). 東京: 岩波書店. = (Original work published 2010). *Eroberungen: Sexuelle Gewalttaten und intime Beziehungen deutscher Soldaten in der Sowjetunion 1941-1945*. Hamburg: Hamburger Edition.
- Parkinson, Anna. (2001). Of death, kitsch, and oelancholia: “Aimée und Jaguar: Eine

- Liebesgeschichte, Berlin 1943" or "Eine Liebe größer als der Tod?". In H. Schmitz (Ed.), *German culture and the uncomfortable past: Representations of National Socialism in contemporary Germanic literature* (pp.143-164). London: Ashgate.
- Paul, Christa. (1996). 『ナチズムと強制売春——強制収容所特別棟の女性たち』. (イエミン恵子, Trans.). 東京: 明石書店. = (Original work published 1994). *Zwangsprostitution: Staatlich errichtete Bordelle im Nationalsozialismus (Reihe Deutsche Vergangenheit)*. Berlin: Edition Hentrich.
- Peukert, Detlev. (1982). *Volksgenossen und Gemeinschaftsfremde: Anpassung, Ausmerze und Aufbegehren unter dem Nationalsozialismus*. Köln: Bund-Verlag.
- Rothe, Anne. (2017). Vicarious victimhood as post-holocaust Jewish identity in Erica Fischer's auto/biography *Aimée and Jaguar*. *CLCWeb: Comparative Literature and Culture*, 19:1, 1-11.
- Schikorra, Christa. (2001). *Kontinuitäten der Ausgrenzung: „Asoziale“ Häftlinge im Frauen-Konzentrationslager Ravensbrück*. Berlin : Metropol Verlag.
- Schoppmann, Claudia. (2016). Zwischen Strafrechtlicherverfolgung und gesellschaftlicher Ächtung: Lesbische Frauen im „Dritten Reich“. In I. Eschebach (Ed.). *Homophobie und Devianz: Weibliche und Männliche Homosexualität im Nationalsozialismus* (pp.35-52). Berlin: Metropol Verlag.
- Sedlaczek, Dietmar et. al. (Eds.). (2005). „Minderwertig“ und „asozial“: Stationen der Verfolgung gesellschaftlicher Außenseiter. Zürich: Chronos.
- Sieg, Katrin. (2002). Sexual desire and social transformation in *Aimée & Jaguar*. *Signs: Journal of Women in Culture & Society*, 2002, Vol. 28:1, 303-331.
- Sommer, Robert. (2009). *Das KZ-Bordell: Sexuelle Zwangsarbeit in nationalsozialistischen Konzentrationslagern*. Paderborn: Schöningh.
- Spoerer, Mark. (2001). *Zwangsarbeit unter dem Hakenkreuz: Ausländische Zivilarbeiter, Kriegsgefangene und Häftlinge im Dritten Reich und im besetzten Europa 1939-1945*. München: DVA.
- Wagenknecht, Peter. (2007). Was ist Heteronormativität? Zu Geschichte und Gehalt des Begriffs. In J. Hartmann & C. Klesse (Eds.). *Heteronormativität: Empirische Studien zu Geschlecht, Sexualität und Macht* (pp.17-34). Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaften.
- Westermann, Stefanie et al. (Eds.). (2009). *Medizin im Dienst der „Erbgesundheit“: Beiträge zur Geschichte der Eugenik und Rassenhygiene*. Münster: LIT.
- Wickert, Christl. (2002). Tabu Lagerbordell. Vom Umgang mit der Zwangsprostitution nach 1945. In I. Eschebach et. al. (Eds.). *Gedächtnis und Geschlecht: Deutungsmuster in Darstellungen des nationalsozialistischen Genozids* (pp.41-58), Frankfurt a. M.: Campus.
- Zimmermann, Michael. (Ed.). (2007). *Zwischen Erziehung und Vernichtung: Zigeunerpolitik und Zigeunerforschung im Europa des 20. Jahrhunderts*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Zinn, Alexander. (2018). „Aus dem Volkskörper entfernt“? Homosexuelle Männer im Nationalsozialismus. Frankfurt a. M.: Campus.

### Cited Films

Clay, Catrine (Director, Producer). (1997). *Love Story Berlin 1942*. United Kingdom: BBC.

Huth, Hanno (Producer), & Färberböck, Max (Director). (2002). *Aimée & Jaguar*. Germany: Zeitgeist Films.

Cole, Janet (Producer), & Epstein, Rob and Jeffrey Friedman (Director). (2000). *Paragraph 175*. United Kingdom: Telling Pictures.

Abstract

**Overcoming the Past or Rendering it Invisible?  
*Aimée & Jaguar* (1994) and the Politics of Memory**

Kae ISHII

It was in the 1990s that research on the issue of “overcoming the past” in postwar Germany began on a full scale in Japan as well as Germany, and there has been progress in extending this research mainly in the fields of politics, education, literature, media, memory and culture of remembrance. However, research on issues of gender and sexuality during the war—such as the regulation of romantic and sexual relations between same sex people and those from different ethnic groups or the regulation of prostitution and wartime sexual violence—is an area that even in Germany has not gained much attention, as related historical materials are difficult to access, and these topics as such are still considered taboo within the field of history. In this paper I would like to think about issues related to the remembrance and the historical study of romantic and sexual (intimate) relations between women by taking a look at selected examples of such relationships and attempts to historicize them.

**Keywords:**

overcoming the past, memory, forgotten victims, Paragraph 175, *Aimée & Jaguar*